

小学校家庭

1 小学校家庭科の指導と評価について

(1) 学習評価の基本的な流れについて

① 内容のまとまりごとの評価規準の作成について

ア 指導と評価の一体化が一層重視されたことから、学習指導要領を手掛かりにして、教師が評価規準を作成し、児童の学習状況を見取っていくことが望ましいとされている。本時の評価規準を作成するために、目標やそれぞれの内容、指導事項をどのように評価するのかを理解することが必要である。

イ 「内容のまとまり」とは、学習指導要領の第2章第8節家庭分野〔小学校学習指導要領解説家庭科編 p100～p102〕における「1 内容」を示す。例えば「B 衣食住の生活」の内容項目「(6)快適な住まい方」については、「指導事項ア 次のような知識及び技能を身に付けること (ア) 住まいの働きが分かり、季節の変化に合わせた生活の大切さや住まい方について理解すること (イ) 住まいの整理・整頓や清掃の仕方を理解し、適切にできること」が「知識及び技能」に関する「内容のまとまり」として捉えられる。

ウ 「指導事項ア」については、「知識・技能」に関する評価規準となり、記載事項の文末を「～すること」から「～している」とする。

エ 「指導事項イ」については「思考・判断・表現」の観点に関する内容と捉え、記載事項の文末を評価の観点の趣旨に基づき、「～について問題を見いだして課題を設定し、様々な解決方法を考え、実践を評価・改善し、考えたことを表現するなどして課題を解決する力を身に付けている」とする。

オ 「学びに向かう力、人間性等」の指導事項に関しては、家庭科の目標(3)〔p12〕を参考にして設定する。「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準については、「指導事項ア及びイ」と家庭科の目標、評価の観点及びその趣旨を踏まえて作成する。その際、対象とする指導内容は、B(6)の指導項目の名称『快適な住まい方』などを用いて示す。「家族の一員として、生活をよりよくしようと、快適な住まい方について、課題の解決に向けて主体的に取り組んだり、振り返って改善したりして生活を工夫し、実践しようとしている」などのように、「粘り強さ・自らの学習の調整・実践しようとする態度」の三つの側面を含めることを基本とする。

② 具体的な評価規準の作成について

ア 「B 衣食住の生活 (2)調理の基礎及び(5)生活を豊かにするための布を用いた製作」については、学習の効果を高めるため、2年間にわたって取り扱い、平易なものから段階的に学習できるよう計画することに留意する。

イ 例えば、題材「おいしく作ろう 伝統的な日常食 ごはんとみそ汁」(第5学年)では「B 衣食住の生活」の(1)「食事の役割」のア、(2)「調理の基礎」のアの(ア)、(イ)、(オ)及びイの指導事項の関連を図って題材の目標を設定する。また、内容のまとまりごとの評価規準を参考にし、題材の評価規準を作成する。「思考・判断・表現」における「内容のまとまりごとの評価規準」としては、「おいしく食べるために調理計画や調理の仕方について問題を見いだして課題を設定し、様々な解決方法を考え、実践を評価・改善し、考えたことを表現するなどして課題を解決する力を身に付けている」となる。さらに「内容のまとまりごとの評価規準を具体化」すると、四つに細分化され、「主体的に学習に取り組む態度」については、三つに細分化される。

ウ 「A 家族・家庭生活 (4)家族・家庭生活についての課題と実践」〔p29〕は、指導事項アのみで構成されている。実践的な活動を家庭や地域などで行うことができるよう配慮し、A(2)及び(3)〔p23, 26〕の学習を基礎として、「B 衣食住の生活」及び「C 消費生活・環境」で学習した内容との関連を図る。例えば、題材「わが家の仕事大作戦 Part 3」

では、冬季休業前に正月に向けての家庭の仕事についてインタビューをした内容などから問題を見だし、課題を設定する。実践したことを計画・実践レポートにまとめ、「主体的に学習に取り組む態度」としてポートフォリオなどを用いて「更によりよい生活にするために、家庭の仕事に関する新たな課題を見付け、家庭での次の実践に取り組もうとしている」のかを評価する。評価計画については、何をどこで評価するのか、授業者がAと評価する根拠を考慮しておく必要がある。

エ 評価については時期や場面を精選することや題材のつながりの中で評価することに留意する。

2 小学校家庭科における1人1台端末の活用について

(1) 活用事例について

文科省のHPにアップされている。「StuDX Style」>「各教科等での活用」>「GIGAスクール構想のもとでの小学校家庭科の指導について」を検索してほしい。

(2) ICT活用のポイントについて（活用事例）

- ① 題材「めざせ！いきいき食生活」内容「B 衣食住の生活」(1)ア, (3)ア(ア)(イ)(ウ)では、「栄養を考えた食事」について、料理や食品の組合せを試行錯誤しながら、栄養のバランスのよい食事について考えることができるようにする。例として、肉や魚などの主菜及び野菜などの副菜からなる学校給食の写真をクラウド上に保存し、児童が試行錯誤して一食分の給食を完成させる。各自が空のおぼんの画像に献立の画像をドラッグしながら考えた献立画像を保存し、それをペアで共有する。「なぜそう考えたの？」などと友達と比較しながら互いの考えの根拠や工夫を認め合う活動を通して、献立の改善に生かすことができる。各自が改善した献立をクラウド上に保存し、学級全体で共有することで、児童が考えを深めることができる。また、大型提示装置を活用し、拡大や焦点化して提示することによって学級全体の場で発表するなど効果的なプレゼンテーションを行ったり、児童一人一人の手元でもその様子を確認したりすることができ、理解を深めることにつながる。
- ② 題材「かしこい消費者を目指して」内容「C消費生活・環境」(1)ア(ア)(イ), イ, (2)ア, イでは、商品を購入する際に、大切だと思う点について学習支援ソフトを用いて意見を交流したり、商品を選ぶ際の決め手となった部分の考えを共有したりして、各自の思考の過程を視覚化しやすくする。商品から様々な情報を得られるように、見本となる商品を様々な角度から撮影した画像を紹介し、オンラインショッピングのように画像を拡大したり、縮小したりしながら、見本となる商品を吟味できるようにする。教師が条件が異なる「母親からのおつかいミッション」の動画を作成し、グループごとに配信することで、課題を自分ごととして捉えられるように配慮した。また、ICT端末での情報と実物を比較しながら、自分が着目した部分の画像に印を付け、その理由をICT端末に記入・保存することで、グループや全体での交流に生かすことができる。多くの友達の考えを知り、自分の消費生活について考えるきっかけにつながる。
- ③ 新型コロナウイルス感染症の拡大により、どうしても調理実習ができない場合はICT端末を活用して、家庭において学習が継続できるようにする。例えば、オンラインでハンバーグの調理を説明して、調理の様子を教師が見るとともに評価を行う。これは、どうしても調理実習ができない場合に限っての対応であり、安易に調理実習を家庭で行うということにならないようにしてほしい。家庭によっては、実施が困難な児童もいるので留意する。

3 参考となる資料等について

- (1) 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校家庭

(国立教育政策研究所教育課程研究センター 令和2年3月)